
星の誇り・愛の欠片 改訂なろう版

真咲静夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星の誇り・愛の欠片 改訂なろう版

【Nコード】

N8377T

【作者名】

真咲静夜

【あらすじ】

宇宙をさま迷う脱出艇にはコールドスリープで眠る少女と休暇に宇宙を漂う男との出会いと分かれの話。

フォレストノベル・自サイトBlogよりの転載

「もう誰も居ない……ねえー」

旅の途中で突如、サズが乗った宇宙船の推進機が壊れた。だが食糧は何もなければ5年ぐらい保つし、飲み水も浄水機能が特化した装置のおかげで困ることはない。

困ると言えば、宇宙船が進まないこと。何かが向かってきても避けられない。

「マニュアルうゝ見てもわっからないいゝ」

メイン画面に写ったマニュアルを見ても何が何だか……

元々、この船はサズのものじゃなかった。サズが捕まった海賊の緊急脱出船。頑丈だし、生命維持機能には特化している。

「今、信号弾を打って、また捕まったらまずいしねえゝ。………仕方ない寝るか。」

冷凍睡眠してるうちに死ぬか助かるか捕まるかするだろう。

どうせ身内は居ない。私にあるのは、1つの星がなくなるだけの破壊力がある歌だけ……一族最後の生き残りである私に残された切り札。

死の旋律……一族の禁忌。

死の旋律を恐れたのか、近場の大国が攻めてきた。そして、母と2人で逃げ出して海賊に捕まった。

母は禁忌の歌で自分の命と引き換えに私を逃がしたのだ。

「とりあえずは1週間寝て、3日起きよう」「そう眩きさつさと冷凍睡眠の装置に入り込んだ。

「頭痛いかもあ」

今まで生きてきた中で、こんなにも頭が痛いことはなく、サズは頭を振った。

「スリープから出しても、丸1日寝ているとは……」

「へ？」

そこに居るのは見たこともない男。

褐色の肌に黒紫の髪に紫紺の瞳。くつきりとした目鼻立ちで、呆れた笑みを浮かべている均整の取れた長身の男。

「あなた……誰？」

一人しか乗っていない船の中で私は冷凍睡眠装置に入っていたはずだ。

「ダグだ。お前は？」

見たこともない衣装を着た男。その体軀からは野性味のある敏捷性と、紫紺の瞳からは回転の早そうな頭がうかがえる。

まだ話せる者が少ない公用語を話す男にサズは驚いた。

「サズ」

サズは寝かされた寝台に座り込んで、物珍しそうにぐるっと辺りを見回した。

「サズか。ところで、サズ。見た目、十代そうだが……」

「十五歳」

「こんなところで何している」

見たこともない装束だ。

似たところだとロムザンのハビエナ地区の祭り装束か。だが、雪のように白い肌に赤眼はムグナ人のようだがプラチナプロンドの人は思い当たらない。ロムザンとムグナは星同士の親交があまりない。しかもハビエナ地区は祭り最中は他の地域との交流を断つから、こんな少女がいるわけがない。

ダグが観察していると、サズの口から思わぬ言葉が出た。

「星が襲われて脱出したら海賊に捕まって、そこから逃げ出したんだけど船の推進機が壊れたの。仕方ないから寝てた。寝てる内に死ぬか助かるかなんとかなるだろうって」

軽く言われた内容はかなりディープで、最後は前向きなのか後ろ向きなのか、よくわからない。

「星が襲われた？ ……お前はどこの生まれだ？」

連邦が出来て以来、星の間には協定が結ばれ、侵略戦争は起きていない。協定違反か

ダグは眉間にあつた皺を更に深めて聞く。

「ケルビム」

「ケルビム……セレナ。ケルビムを検索」

聞いたことない星の名前にピンとこないダグは船の人工頭脳に語り掛けた。

船の人工頭脳SE RNA30、通称セレナはメインモニターを起動して顔を見せた。

『ケルビム……ケルビム……ああ、あつた。連邦暦以前の宇宙暦、二千七百二十八年、今から三百年前の大国エレハイムの歴史で侵攻した星の名前ね。エレハイムが唯一、侵略出来なかつた星がケルビム』

エレハイムは辺境の大国。一つの銀河が一つ国で近隣銀河では恐れられていた。

連邦になる前にはかなりの侵略を繰り返していた国だった。

「侵攻したが侵略までいかなかつたのか？」

ダグは腕を組み、右手の中指で左腕をトントンとリズムを刻む。

サズは突然現れた女に目を丸くした。この船内に他に人が居た気配がないからだ。

『違うわね。星の住民に不思議な力があつて侵攻したけど星が砕けちつたのよ』

空中に突如現れたモニターの女、セレナの言葉に、サズは頭を抱え

た。

「……………三百年？あのくそ船、推進機だけじゃなく、冷凍睡眠装置も壊れてたのか」

『呆れた。あなた気にするところはそこなの？』

「それ以外に何を気にしろとお？星が砕けたならいい。仲間が捕まって生物兵器にされてなければ……ケルビムの誇りが汚されていないければいいんだ」

セレナとサズのやりとりに気になるところがあったダグがサズに問いかけた。

「生物兵器にされるような力とは？」

「内緒。でもあなたは私を助けた。ならば私はあなたを命懸けで助ける。命は命で礼をするのが、ケルビムの流儀。どこまでもついていくわ」

見ず知らずの自分に付いてくるという少女。三百年前に滅びた星の少女ともなれば、まずはロスト・ワールドの人間として届け出て戸籍の取得。

ただこの外見だとこの少女をうかつに世間には出せないだろう。

「身寄りもないのが決定なら、俺が引き取るしかなさそうだな」

そう言った途端、サズの目が光る。ダグに跪き、強い意志を持つ眼差しをダグ向ける。

「私の名前はサージズイリー・ケルビム。ケルビム王家の最後の生き残りとして、あなたに命を捧げる」

エネルギーが切れかけの見たこともない小型脱出艇があり、拾ってみたら、プラチナブロードの少女が眠っていた。職務上、見てみぬことも出来ずに、少女を自分の船に連れてきたのだ。

「……本当に変なもん拾った。ダグラス・バズ。連邦警察第八エリア統括長官だ」

「連邦警察？」

百八十年前に連邦が宇宙に立ち上がり政府ができた。つまり三百年眠っていたサズに今の常識はない。

「セレナ……俺は仕事するから、この宇宙で必要最低限の常識を教えてやれ」

『かしこまりました。さてサージズイ「サズでいい」サズね。先ずはシャワーと着替えと食事したら、勉強しましょうねえ。はい、こっちよ』

次々と起動しては消えるモニターのセレナを追い掛けるようにして部屋から出たサズをダグは少しだけ遠い目をして見送った。

「ダズ……愛してる」

……あなたが私のために命を差し出そうとするのは目に見えてる。私は歌うよ。

あなたと子どもを守るために……人質は……いらぬ。

「……サズ。何故俺が戻るのを待たなかつた」

無人の宇宙。

家があつたはずの人工惑星も見当たらない。十歳の息子を脱出艇に載せ、サズはダグラスを狙つた賊もろとも宇宙に散つた。

命は命で礼を尽くすのが礼儀。出会つてから五年。

いつの間にか育んでいた恋慕の情にサズが成人した年に籍を入れた。

更にそれから十二年。夫婦として過ごした。それでも忘れなかつた星の誇り。

「母さんは歌つたんだ。死の旋律を……ケルビムの誇りだつて……母さん……母さん……」

床に跪き、泣き崩れるプラチナブロンドに褐色の肌の息子。

息子の肩に手を置くと、少年は父に顔を向けた。

ダグを潤つた赤眼が見つめる。

「ナリム。ナーナリムガナス・ダズ・ケルビム。それがお前の正式名だ。ケルビム王家の、惑星ケルビムの最後の生き残りの息子だ。お前は生きていることを誇りに思え」

「父さん……」

「三百年以上前に消えた星の誇りだ。大事にしなさい。お前が生き

ているかぎり歴史は消えない」

「……はい」

ダグは息子を抱き締めると、背中を撫でる。

「死の旋律か……確かに生物兵器になりかねない力だ。《内緒》ね……スゲー内緒だよ」

「父さん……俺の中にも死の旋律は眠ってる。母さんがどうすればいいかを教えてくれたよ」

「そうか……ならば誰にも知られないように」

「父さん……」

連邦警察局長として、連邦警察の頂点に立つ男は、ふらりと立ち上がる。

「少し寝かせてくれ」 つれない妻の漂うこの場所で……

「俺も一緒に寝ていい？」

「ああ……おいで」

「夢の中だけでもサズに会えるように……」

束の間の休憩をしようか。親子は寝台に寄り添った。

「ナリム」

「父さん。シャナ、ミルバ」

「……父さんゴメン。ミルバ……追いで。今から教えることはお前だけの秘密だ」

プラチナブロンドの短い髪に、赤眼褐色の肌の青年は、同じくプラチナブロンドの柔らかい髪に赤眼の娘の額に自らの額をつける。

「……プラチナブロンドと赤眼はケルビムの誇りだ。忘れるな。ケルビム最後の王女、ミネルバニア・ダズ・ケルビム。……星の誇りと生命をつなげ。……父さん。妻と娘をお願いします。シャナ愛してる」

ナリムは父と妻子の命を守るために駆け出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8377t/>

星の誇り・愛の欠片 改訂なろう版

2011年6月5日15時49分発行